

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第32号
平成26年6月18日発行
発行所 〒424-0806
静岡市清水区辻1-1-3-103
(公財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054)388-9181
発行人 山田 健司
題字 竹内 宏
印刷所 ㈱ニシガイ
TEL (054)352-2188

咸臨丸事件と壮士墓

会長 山田健司

咸臨丸事件は徳川と新政府との小さな戦闘だが、清水の近代史のなかで忘れることのできない大事件といえる。嚴罰を恐れず「死んでしまえば同じ仏」と言い切った次郎長の心意気は、激動の時代を照らした一筋の光りであった。

明治元年（一八六八）九月十八日、銚子沖で大シケにあった咸臨丸は清水港に入ってきた。乗員の大部分は艦の修繕の手筈をつけるために上陸し、艦に残っていたのは十人ほどだ。そこへ三艘の官軍の軍艦から大砲や小銃で撃ち込まれたが、咸臨丸は反撃しなかった。副艦長の春山弁蔵は居残った乗員と甲板で白旗を振ったが、砲撃はやまず抜刀して乗り込んできた。そこで斬り合いとなり多勢に無勢、ずたずたに斬られて海に捨てられた。その屍体が波に漂うさまは悲惨そのものであったという。咸臨丸事件は一方的でごく短時間の戦闘だった。その後咸臨丸は品川に引かれていった。海には七体の屍体が残った。この事件は、慶応四年九月七日の改元から明治元年になっての最初の

大事件といえよう。

この年、次郎長は浜松藩家老伏谷如水によって抜擢され、清水港警固役を仰せつかり帯刀を許されていた。清水港に浮遊する遺体を片付けようとする者は誰もいなかった。賊軍に加担する者は嚴罰に処されるからだ。次郎長はさすがに躊躇する子分衆を励まして舟を出したことだろう。夜、こっそり港内に浮かぶ屍体を捜して、七体を集め向島にひそかに運び松の木の下に埋めた。



山岡鉄舟が揮毫した「壮士墓」（築地町）

山岡鉄舟は役目柄、次郎長を呼び「かりそめにも朝廷に対して賊名を負った者の死骸をどういう了簡で始末したのだ」と言った。次郎長は覚悟はできていて悪びれた様子ではなかった。「賊軍か官軍か知りませんが、それは生きていく間のことで、死んでしまえば同じ仏じゃございせんか。仏に敵も味方もござりませぬ。港のためと仏のためと思つてやった仕事ですが、もしいけないとおっしゃるなら、どうともお咎めを受けましよう」ときっぱり言つた。さすがの鉄舟も反論できなかった。この言葉は博徒といつて一笑に付すことのできない、現代人にも通じるものがあつた。

鉄舟はこの行為は小人輩の芸ではないと感銘し、自ら筆をとり揮毫した。雄渾な「壮士墓」は次郎長と鉄舟という異彩な人間同志の絆を強くしていったことを、その後の歴史が物語っている。

平成二十五年度秋の探訪ツアー

次郎長開墾と富士に眠る侠客の墓参

運営委員 佐野大三郎

富士山が世界文化遺産に登録された。しかも三保の松原を含めてという快挙に清水が久しぶりに沸いた。講談や浪花節では、次郎長の男つぶりを富士の大きさと清らかさにたとえ「羽衣の松と並んでその名を残す」と軽快に語られた。たしかに清水みなどの次郎長さんには富士のお山がよく似合う。



富士市大淵の開墾地から富士山を望む

富士山と次郎長いえば「富士大淵の開墾」である。延べ約十年という年月を注ぎ込んだ大事業で、「次郎長町」という町名を富士山麓に残した。富士山が世界文化遺産に登録され、注目をあびているこの時を句と捉え、秋の探訪ツアーは実地研修を行うこととなった。

十一月二十七日、好天に恵まれ、まずは次郎長一家二十八人衆の一人辻の勝五郎の墓のある富士市今泉の法雲寺を訪ねた。勝五郎は次郎長の開墾事業に必要な食料の調達、資材の提供等に尽力。晩年は寺の檀家総代を務めるなど地元の篤志家であった。次に市内天間に、黒駒一家に追われる次郎長をかくまい身代わりになって惨死した由比の松五郎こと井出松五郎の墓参をした。次郎長ゆかりの人物の墓参供養は参加者に好評だった。

鉄舟や次郎長ゆかりの宿、吉原の鯛屋で昼食をとり、次は北へ進み開墾地である大淵の次郎長町へ。溶岩石の不毛の地の開墾に、堀削機などの耕具も無く飲み水にも不自由した苦勞話が伝わっているが、現在は立派な茶畑が広がっている。

次郎長町では現地の人々に温かく迎えていただき、白髭神社では案内役の荻野氏の丁寧な解説に



辻の勝五郎が眠る富士市今泉の法雲寺にて

興味深く耳を傾けた。境内の次郎長開墾碑の石工は井出助五郎とあり、井出松五郎の倅で父亡きあと次郎長のもとで開墾を手助けした証人である。

次に、天照神社のある標高千メートルの地を指した。天照教は桜田門外の変で井伊大老を斬った水戸浪士の一人徳田寛豊が久邇宮の御内意を押し、内務卿伊藤博文の許可を得、静岡県令大迫清貞により設立許可を受けて伊勢の皇太神宮より御分霊を富士山麓へ奉遷したものであり、世人救済国家繁栄のための教化活動を行ってきた。

天照神社の造成には西郷従道、品川弥二郎、山岡鉄舟、次郎長、高島嘉右衛門等の人物が関り、社内の母屋には公爵九条道孝（孝明天皇の義弟）の為書の書が掲げられている。

敷地内の次郎長手植えの桜などを拝見し天照神社をあとに、帰り道には富士山をご神体とする富士宮・山宮神社に参拝し帰還した。

次郎長の富士開墾を再検証

運営委員 中田元比古

次郎長の富士開墾については、過去にも会報六号にて故服部玲一氏が取り上げており、開墾についての概要のほか、次郎長が富士を目指した理由として同時期に建設された天照教との関係を示唆している。現地研修も今回以外に二度ほど探訪ツアーを行っているが、その後両者の関係に触れることは無かった。今回の研修で得た情報や資料を基に、もう一度その事業に隠されたミステリーを探ってみることにした。

次郎長の目的

徳川幕府が倒れ、明治維新の混乱を抑える調整役として次郎長は伏谷如水より抜擢された。さらに咸臨丸事件での正義の行動は、次郎長の人生にとって大きな転換点となった。旧幕臣達から評価と心腹を受け、山岡鉄舟との親交を通して多くの知遇を得てゆく中、俠客魂のベクトルは徐々に社会への貢献へと向けられていく。

徳川家臣団の駿河移住が始まり、彼らの宿と授産対策。そして何より子分達の失業対策で奔走している頃、明治政府の政策は富国強兵、殖産興業へと突き進んでいた。生糸とお茶の輸出好評に絡み、次郎長が音頭をとって「お米の漕」から「お茶の港」へと清水港の再編が進んだ。そんな中、牧の原の入植の成功を手本とし県令大迫貞清や山

岡鉄舟から次郎長へ富士大淵の開墾事業の話が持ち込まれたのである。

県からの助成金二千元を資金にお茶の栽培をめざし、明治七年から十七年まで十年の歳月をかけて七十六ヘクタールの土地を開墾した。しかし、目的のお茶は標高の高い寒冷地の上、火山の酸性土壌のため育たず、殖産としての成果からするとこの事業は失敗と言わざるを得なかった。

富士開墾の謎

次郎長の富士開墾にはいくつかの疑問点がある。ここからは開墾を検証し富士を目指した真の理由に迫りたい。まず、お茶の失敗についてだが、環境や土壌の状態から生産の見込み違いは比較的早い段階で判断していたと思われる。

また、次郎長が開墾したと言われている七六町



富士市大淵の次郎長開墾地には「次郎長町」という地名が残っている。

三反歩（約七十六ヘクタール）という数字について認識違いが指摘されている。かつて次郎長開墾地を調査した田中淳一氏の詳細な資料「清水次郎長の次郎長開墾の歩み」によると、開墾地は明治十七年に打ち切りとなり一旦国に返す形となったが、その後の明治二十一年より民間への払い下げの許可を得て、次郎長（没後は妻おてふ）が受けた総面積は七十二ヘクタールだった。しかし大正五年の開墾地の売却がすべて完了した時点での土

地台帳の地目には宅地と畑地を合わせて七、八ヘクタールほどで、あとはほぼ林地を原野としただけだったと報告している。つまり、七十六（正確には七十二）ヘクタールは結果的に払い下げを受けた範囲であって、殖産を目的とし次郎長が開墾した範囲はわずか七、八ヘクタールというのが実質だったことになる。

こうした陽の目を見ないお茶の生産と、拡大しない開墾地という状況にあつても囚人の数は追加増員し続け十年も費やしたのはなぜだろうか？

更はその払い下げの七十二ヘクタールのうち四十ヘクタールが高島嘉右衛門という人物へ売却されている。この人物が突如として開墾に関係してきたこともきつと何か理由があるはずだ。

高島嘉右衛門という人物は、開港場横浜の埋め立て工事を受け持ち（高島町・高島台の地名がそれ）、睦奥宗光や伊藤博文などと関係が深かった政商で、西郷従道を通じ天照教設立に大いに関わったと言われる。

また、興味深いのは高島嘉右衛門が横浜の埋め立ての際に遊郭「神風楼」を誘致した人物であること。次郎長は横浜の商人と静岡の茶商を結びつけるために清水港から蒸気船に乗って横浜を訪れる際、必ずこの「神風楼」へ寄ったというのは有名な話で、証明する記録こそないが次郎長と高島には「神風楼」を通じて接点はあつたと考えてよいと思う。

このあたりに服部氏が示唆した富士開墾と天照教の密接な関係が見え隠れするのである。



天照教社内はたくさんの巨木で昼でも薄暗い。右奥が次郎長手植えの桜。

開墾、もう一つの目的

今でこそ天照教は次郎長開墾地より更に上の標高千メートルの地に人知れずひっそりたたずんでいるが、その御霊は伊勢神宮より分霊したものであり、政府の要人や九条家をはじめとする皇

族が関係していたと言われている。天照教社の建設意義は国民全体の新たな宗教的な拠り所とするところにあり、当時の国家が推進するプロジェクトであつたと言えよう。

問題は次郎長開墾地よりも更に過酷な位置にある天照教の地を、いったい誰が切り開いて建設したのかということである。たとえ国家的なプロジェクトとはいえ厳しい環境下での労働は困難を極め、その人材の確保も難しい。

そこで証言や資料は無いので全くの推測ではあるが、次郎長開墾の囚人が天照教の建設の労働力となり、高島が設計と資金、あるいは次郎長が事業から手を引いた後の仕上げを担当したと考えれば、次郎長開墾が継続された理由と払い下げされた開墾地の内訳、そして天照教社内の手植えの桜の謎が解ける。

次郎長開墾は、その当初から天照教社建設のための一翼を担っていたのではないかと推測されるのである。

ただ、もしそうであれば、富士開墾に対し我々がイメージする次郎長のベンチャー的な先見性を否定してしまうことになる。

しかし、県令大迫貞清が次郎長に贈った「皇国のために」という歌の意味を深く考えるならば、天照教の建設こそ国の期待を背負った大事業であり、そのためにそこに開墾地が選ばれ、労働力である囚人を統率できる唯一の人物として次郎長に白羽の矢がたつたのである。次郎長ならばこの期待に応えるだろうと。

打ち切りの理由

次郎長ファミリを総動員した富士の開墾は明治十七年に打ち切りとなる。資金切れが主な理由となっているが、同年に行われた博徒一斉刈込みによる次郎長逮捕も大きな理由の一つではないかと思う。

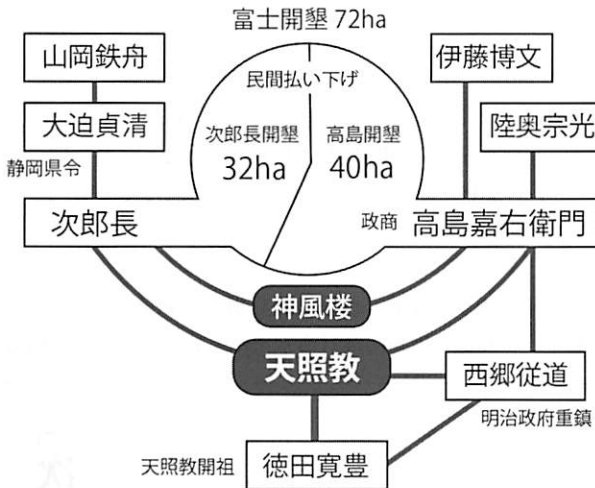
社会事業に目覚め、皇国の為に自ら汗水を流していた次郎長にとって井宮への収監は青天の霹靂であった。しかし、次郎長は博徒の時代の時の様に逃げ隠れしなかった。自由民権運動を方々で活躍している博徒に対し、警察の見せしめとして自分が逮捕されることも恐らく承知のことだったに違いない。子分衆のことを考え、皆に罪が及ばぬよう素直に御上の裁きに従い服役した。

その姿はまさに、富士のお山の如くどっしりと据わる次郎長翁を想像させるのである。



次郎長開墾記念碑（富士市大淵）

富士開墾を取り巻く人物関係図



壮士墓の墓参供養

咸臨丸事件の九月十八日

明治元年九月十八日、清水港で起きた咸臨丸事件は、その後の次郎長の大きな転機となった。

我々は咸臨丸事件を「次郎長の功績」という点から捉えがちであるが、事件の主役は港に散った咸臨丸乗組員であることを忘れてはならない。

死者は生前の身分に関係なく平等に供養する海のしきたりに従い、処罰を恐れず犠牲者を葬った次郎長の精神を引き継ぎ、これまでに小笠原長生代表の次郎長顕彰会、地元築地町の方々が慰霊供養を行ってきた。次郎長翁を知る会は、こうした先人たちの意思を引き継ぎ、今後も特別な想いで命日には墓参供養を続けていこうと思う。（中田）



残暑のなか「壮士墓」の墓参供養をしました。

さまざまな事業に取り組んでいます

- 次郎長供養祭（梅蔭寺にて）

平成24年6月6日

平成25年6月12日

- 「壮士墓」墓前供養

平成25年9月18日

- 創立20周年記念講演会

平成24年6月6日

「加藤剛さん清水を語る」

講師：加藤剛氏、頼三四郎氏

（清水テルサ500名満席）



加藤剛氏、頼三四郎氏と本会役員のみなさん（清水テルサ）

- 次郎長史跡探訪ツアー

平成25年3月6日（41名参加）

「山梨県立博物館 黒駒勝蔵対清水次郎長特別展」



次郎長巷談「次郎長と富士開墾」(25年8月28日)

- 次郎長巷談（担当：中田元比古・磯谷臣司）

平成25年6月12日 ① 120年前の葬列と同じ道歩く

8月28日 ② 祝世界文化遺産 次郎長と富士開墾

11月30日 ③ 小説「波止場浪漫」を読んで（前）

平成26年2月15日 ④ 小説「波止場浪漫」を読んで（後）

- 資料提供

① 諸田玲子氏の新聞連載小説「波止場浪漫」執筆へ協力

② 山梨県立博物館「黒駒勝蔵対清水次郎長特別展」へ展示協力

「清水次郎長と天田愚庵の物語」

- ① 7月12日（土）13:30～15:00

次郎長と愚庵の人物紹介

- ② 8月9日（土）13:30～15:00

愚庵が次郎長に出会うまで

- ③ 11月8日（土）13:30～15:00

次郎長の養子となり富士開墾に参加

- ④ 27年2月14日（土）13:30～15:00

「東海遊侠伝」の出版

講師 次郎長翁を知る会 山田健司

会場 清水港船宿記念館「末廣」

静岡市清水区港町1-2-14 054-351-6070

主催 （公財）静岡観光コンベンション協会清水事務所

担当・木原 054-388-9181

「次郎長巷談」のお知らせ

天田愚庵は戊辰戦争で父母妹が行方不明になり、全国を二十年にわたって探し歩いた。時は幕末から明治にかけての一大波瀾期であったため、天田愚庵と出会った人々はあらゆる階層の、それも異彩のある人物が多かった。なかでも次郎長とは運命的な出会いであった。

そこで、今年度の次郎長巷談は「清水次郎長と天田愚庵の物語」として企画しました。天田五郎といていた時、次郎長と出会って、東海遊侠伝を執筆し、世に出すまでを四回に分けて話します。